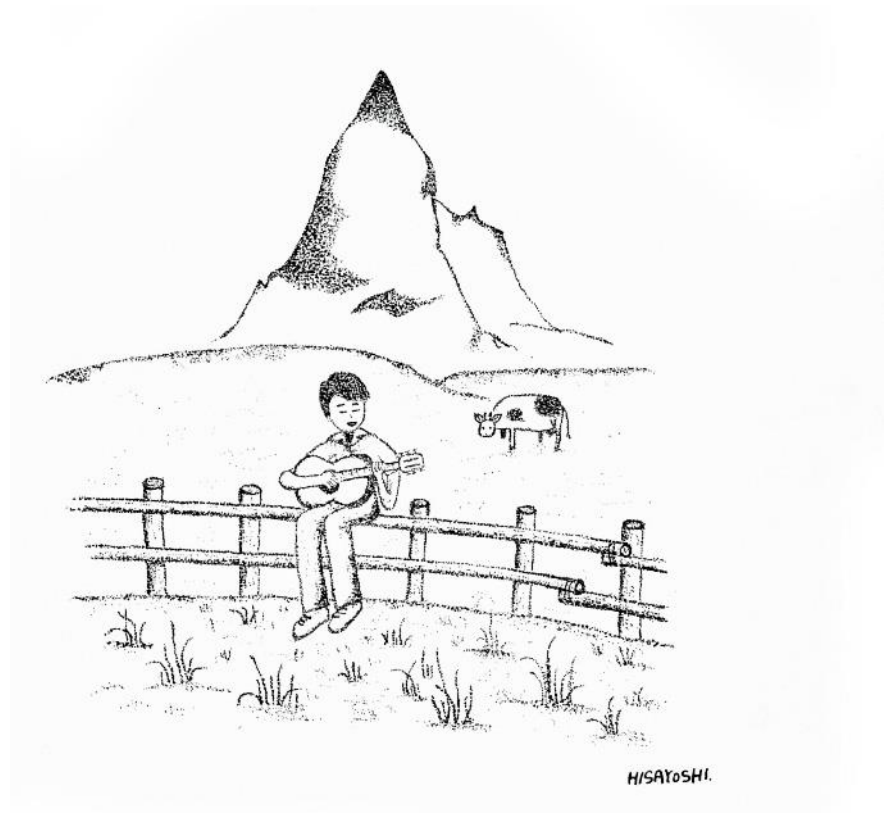


オーナー若き日の足跡

愛する緑の大地 6月の日記



HISAYOSHI.



【野口久義著『愛する緑の大地』（27）】

5、六月のたより〈1〉

6月1日（土）

三日間の休日はシャモニーの谷で過ごすことにし、山登りの道具と一緒にサレーブをあとにする。

シャモニー街道はすっかり緑が濃くなってほんとうに初夏という感じがする。シャモニーの谷もやはり初夏だった。けれど、高嶺は三月のときと変わらず、雪をまとってきびしい表情だった。

ガイヤン（岩登りのゲレンデ）の湖のほとりにテントを張って、時々雨の降る中ガイヤンの岩場を登る。

針峰やモンブランにまつわる黒い雲や、さっきまでの雨に脅かされて、山登りをするファイトは消えてしまいそうだった。白鳥の不気味な鳴き声、二ヶ月ぶりで大地の上での夜は寝苦しかった。山荘のベッドが快適すぎるからだろう。

6月2日（日）

午前5時、朝靄につつまれた湖に白鳥は愛の歌をうたう。モンブランはピンク色に染まり、平和な一日が荘厳のうちに目を開き始める。

ぼくらは岩のコースはやめて、ヴァレ・ブランシュを歩いて下ることにした。

レビュファ山荘に近藤先生を訪ねると、今日はアンドレ・コンタミン（フランス国立登山スキー学校教官）とヴァレ・ブランシュをスキーで滑降するというので、ミディまで一緒に行くことにした。三月に、ぼくらがブレチエールを登ったときに、冬の第2登だと真っ先に教えてくれたのがコンタミンだった。

ミディのケーブルに乗って山頂へ行くのも2ヶ月ぶりのこと、冬がなつかしく思い出されてくる。高度差 1,600m の途中、支点のない上部ケーブルが風雪で止まってしまった事があった。まったく真ん中で左右に揺れているんだ。それは怖いものだった。

ミディのコルまで行って、先生とコンタミンはスキーを、ぼくらは山靴にアイゼンをくくりつけた。

「夕食の用意をして待っていますから！」

と先生は言う、もう滑りだし見事なシュプールをえがきながら、あっというまに、ぼくらの視界から消えた。氷河のクレバスも安定しているし、天気もきょう一日もってくれるだろう。

ぼくらはザイルにつながって歩いた。50日近くも広々とした放牧場で飛んだり跳ねたりしてきたので、ともすると駆け出してしまいそうだったし、クレバスの危険のためもあった。

夕方、近藤先生夫妻を囲んで夕食を共にした。そして、夜の更けるのを忘れて思い出を掘り起こしては笑い、夢を追いかけては童心にかえり、今宵のレビュファ山荘は屋根が吹っ飛ぶのではないか、と思うほどだった。

【ヴァレ・ブランシュで過ごす休日】

エギーユ・ド・ミディの頂上までは近藤先生とアンドレ・コンタミンと同行。その夜はレビュファ山荘で近藤先生夫妻と夜遅くまで歓談する。

最初の写真は、ヴァレ・ブランシュで憩う三人。野口さん撮影であろう。

2番目の写真は、レ・クルト山頂の近藤等とアンドレ・コンタミヌ。着ているセーターから右が近藤先生、左がコンタミヌであろう。「わが回想のアルプス」(2010)東京新聞刊より。

3番目の写真は、近藤先生が「わが最良のリーダー」と呼んだアンドレ・コンタミヌ。ラ・ノーヌの岩稜にて。「わが回想のアルプス」(2010)東京新聞刊より。



ミヤモニの休日
バアレ・ブランシュにて



オーナー若き日の足跡 No.30 川崎泰照さんの face book より

【野口久義著『愛する緑の大地』(28)】

5、六月のたより〈2〉

6月3日(月)

午前1時、強烈な雨の中、先生夫妻に別れをつげサレーブへ向かった。運転は福田君、他の3人は高いびきだった。夜明けが近いころ山荘に帰り、熱い紅茶を飲んでからベッドに沈み込んだ。

昼ごろ目がさめ、午後は雨上がりの気持ちよい草原でギターを弾いて過ごした。自然の中で生活しながらも、なお自然を求めて旅立って行く。ぼくの身体は白と緑の中に溶け込んでしまいそうだ。

6月4日（火）

きょうからフランスは動きはじめた。実に12日間もゼネストをやっていたのだ。あきれんやら、感心するやらだった。なにしろ交通機関はすべてストップ、郵便も新聞もなく、銀行もデパートも、ガソリンスタンドさえ閉めたままだった。日本だったら、どうなるのだろう。

一日一人で薪割りだった。櫟の薪を一日握っているのだから、夕方になったら手がざらざらになっていた。三月に花崗岩の岩場で六日間過ごして帰ってきたときも、きょうのようにざらざらになっていた。

6月5日（水）

森の中からカッコウの鳴き声がのどかに流れてくる。

林の道にはリスが朝食を求めている。

ぼくらは、そんな道を出勤できるんだ。

きょうは手島君と一緒に薪割り。疲れると、サクランボの木の下に走って行ってサクランボをほおぼる。甘酸っぱく、ほっぺたが落ちそうだ。サクランボが鈴なりになっている木が家のまわりに何十本もあるのだから、うれしくなってくる。下水工事にきているイタリア人が遊びにきて、いろいろ話し込んだりした。

山荘に帰ったぼくらは、今度の日曜日のパーティーのために歌の練習をした。ぼくがギターをあまり弾けないので、レパートリーは少ない。

6月6日（木）

ぼくだけが薪割り。みんなは干し草作りだった。とても辛い仕事だと三人は言っている。

あしたは、四人共干し草作りなので早くベッドに入った。

6月7日（金）

冬のための干し草作りがいよいよ本格的に始まった。いや実に辛い仕事だ。作業は機械が大半をやってくれるものの、機械にできないところはすべてが人力なのだ。

はじめ、刈り取った草をホークでよくひっかき廻し、よく陽が当たるようにする。次は同じように裏返しにする。乾いた草を機械で一列に並べるが、仲間外れを列に入れてあげる。次に機械は干した草を吸い込み、一抱えもある大きなパックになって次々と出てくる。それを、うしろの台車に積み上げるのだ。台車がいっぱいになると、それを運び納屋に積む。この繰り返しののだ。腕はあっという間にミミズバシだらけになってしまった。これが広大な範囲にあるのだ。日本のように湿度が高くないから、朝刈り取った草は、午後には梱包できる。でも、雨が降ったらそれこそ大変。一度刈り取った草は腐ってしまうから、スピードが要求されるわけだ。

休憩中に呑むワインやビールも、日中の暑さの中なので、夕方になるともうフラフラになっている。山荘へ帰ると、勉強をするどころか、冷たい水をガブ飲みし、腹をこわすといけなないので、胃の薬も飲んでベッドに崩れるように寝てしまうのだった。

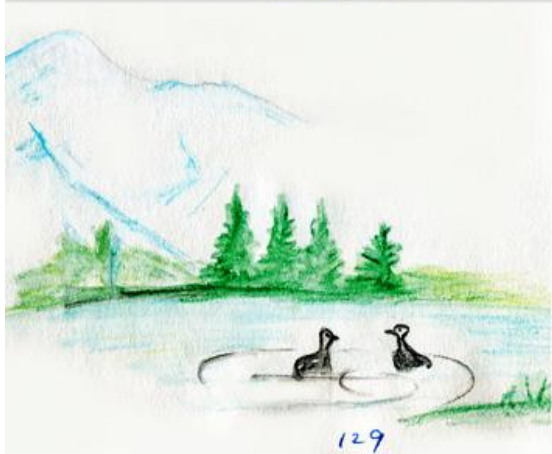
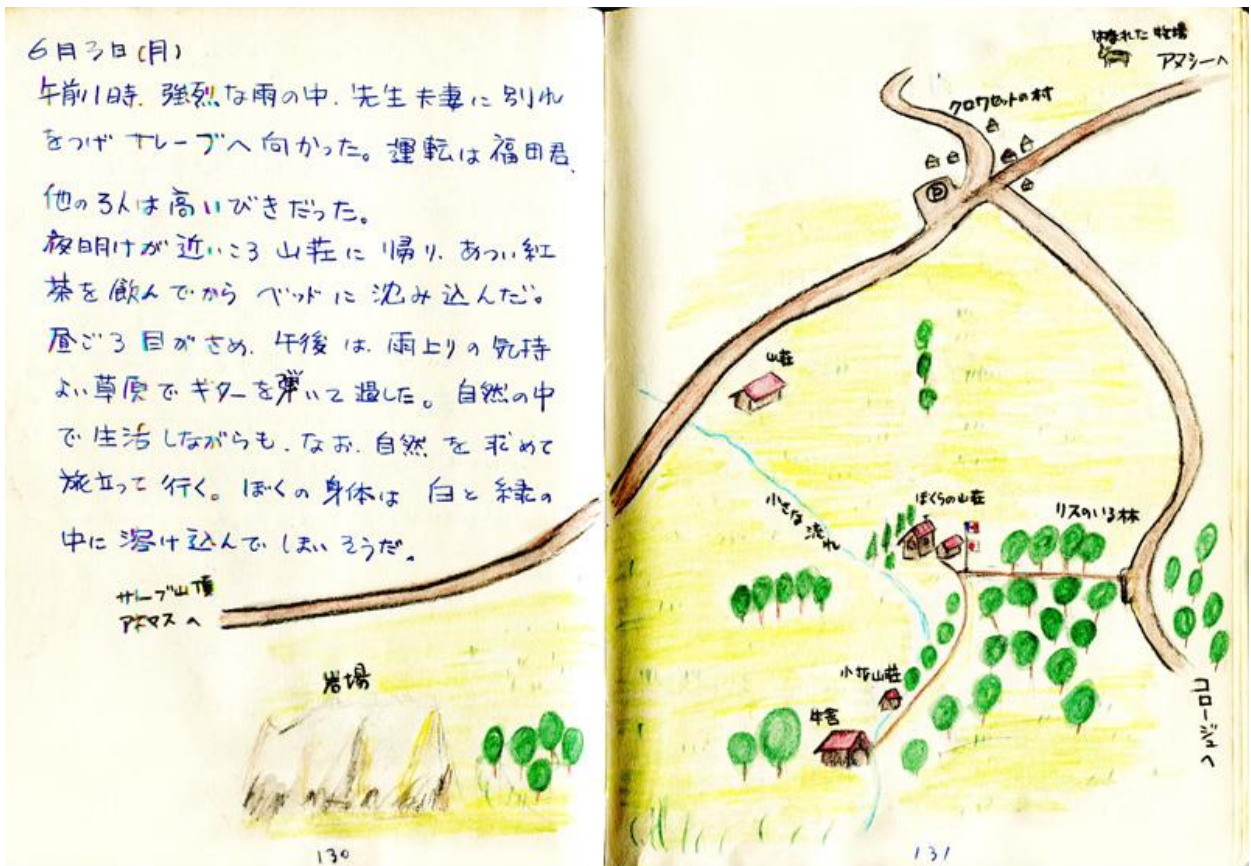
【干し草作りの重労働】

仕事しながらサクランボを食べられるよろこび。

最初の絵は、以前にも右側部分を出したが、サレーブ山近くの岩場まで入った鳥観図。労作だ。2番目の絵は、後ろにモンブラン山群、手前の池では水鳥が泳ぐ。シャモニーでのスケッチだろうか。

3番目の絵は、サクランボの実をもいで食べようとしている野口さん。

4番目の絵は、第5章の中扉の挿絵。入道雲に黄色い花。



オーナー若き日の足跡 No.31 川崎泰照さんの face book より

野口久義著『愛する緑の大地』（29）】

5、六月のたより 〈3〉

6月8日（土）

休日でも、干し草の都合で出勤だ。ぼくらはヘルナンの重要な仕事を与えられているのだから。汗をかいて働いたあとの休憩、冷たいワインやビールが実にうまい。

フラフラになるのはわかるんだけど、そう頭も使わないからついつい飲んでしまうんだ。面白くないからとか、怒られたからとかとって飲む酒などうまいはずがない。

午前中2回、午後に3回はこのワインタイムがあるのだ。でっかい太陽の下で飲むワインはほんとうに健康的だ。

干し草もきょうのところは一段落し、4時ごろより牛舎の掃除をする。すぐそばに農園があって、そこのおじさんが苺畑に水をまいている。これはまたとないチャンスと、ぼくは近づいて行った。

「こんにちは、おじさん。苺が赤くてとてもおいしそうですね。」

「いや、ありがとう。どうだね、仕事は。」

などと言いながら、大きいのを一抱えも腕いでくれた。みんなにもあげようと思ったら、

「ここで食べていきなさい。」とおじさんは言った。

「モグモグ、ガツガツ……。とてもおいしい、ごちそうさま！」

きょうは休日だから、いつもより早く終えた。

あしたのパーティー用の炭やイスを積んで帰る途中、税関で、

「なぜ、往復しているのか？」

「キャンピング。」

一瞬どきりとしたが、何も起こらず国境を越えた。もう少しだから……。と祈らずにはいられない。

コロージュの岩場で少し練習。

山荘に帰り、2ヶ月間も伸ばしっぱなしのひげを剃り、歌の総仕上げをやってからベッドに入った。

6月9日（日）

いつもより早く起きて掃除をやる予定だったが、みんな疲れていたためか、起きたのは8時。いつもなら仕事を始める時間だった。

10時ごろからヘルナン一家をはじめとして、お客さんが次々とやってきた。ヘルナンは炭をおこしマトンを焼きはじめた。奥さんは台所で何やら作り始める。

お客さんは全部で12人。ぼくらの知らないのは、ガレージの社長のフィアンセでモロッコ、カサブランカの人だけだった。ヘルナンの兄の家族は誰も来なかった。それは意外なことだった。

山荘のまわりには放された仔牛たちが勢揃いし、この風変わりな風景を涎をたらしながら眺めている。

マトンにはワインがかけられて、なおも回転させながら焼く。いいにおいが、あたりに漂う。テーブルにはたくさんの料理が並べられ、マトンもテーブルの上に乗った。子供たちは、すっかりはしゃいでいる。いや、子供たちだけじゃない。大人たちもそうだ。

「サンテ！（乾杯！）」

そして、飲んだり食べたり、しゃべったり……。

実ににぎやかだ。そのうち、奥さんが「ギターを弾いて……。」と言う。

ぼくらは、いつまでもいつまでも、ラブユウトウキョウ、ラ・ノビアの三曲を歌った。それから、みんなでサレーブの草原や森を散歩する。ぼくが蝶を見つけ。

「あっ、パピヨン！」と言うと、

「日本語ではなんて言うの？」と奥さん。

「チョウチョ！」と答えると、

おかしそうに “チョウチョ” と言い、アニクのお母さんと顔を見合わせて笑い、“チョウ
チョ、チョウチョ” と言いながら追いかけている。とても楽しそうだ。

夏の白い雲、さわやかな初夏の風、花の咲く草原、遠い街、遠い湖・・・。

そんな中を笑いながらたどる人たちの姿は、汚れなき純粋な人間像であるかのように感じられるのであった。

夕刻の一陣の風と共に、みんな引き上げていった。山荘は再び静寂に包まれた。

夕焼けがとてもきれいで、ジュラに沈むまでみんなで見ている。

【送別会】

子供も大人もはしゃぐ送別会。

最初の絵は、チョウチョを追いかける奥さんとアニクのお母さんの挿絵。

2番目の写真は、みんなで草原を散歩する写真。

3番目の絵は、でっかい太陽の下で休憩中に飲むワインの挿絵。



送別会の日
みんなでアレーブの草原を散歩





【野口久義『愛する緑の大地』（30）】

5、六月のたより〈4〉

6月10日（月）

干し草作りだ。乾燥するのを待つ間、畑に大豆の種を蒔いた。

夕方になると、大忙しで大変な労働となる。納屋には干し草が山のように積まれていく。増えていく干し草の山、これにはぼくらの汗がにじんでいる。ヘルナン一家のために、放牧場にいる仔牛たちのために、ぼくらはミミズバシなんかすっかり忘れて働いた。

6月11日（火）

干し草作りの中休みで、ガレージの仕事だった。騒然とする街での仕事はいやだった。サレーブにいと、街のことなどすっかり忘れているのに、街の中っているとサレーブのことばかり考えているぼく。緑の中に囲まれていなければいけない人間になってしまったのだろうか。

6月12日（水）

ヨーロッパのジャガ芋はとてもおいしい。ヨーロッパの人々は毎日欠かさず食べている。重要なタンパク源なのである。日本では北海道のが、ヨーロッパと同じようにふっくらしておいしい。きょうはアニクの家のジャガ芋畑の雑草抜きだ。ぶどう畑と同様に雑草の方がはるかに大きい。一見すると、一面の雑草の原っぱという感じだ。

午後は干し草作り。だが、梱包機のチェーンが切れて、悪いことに雨が降り始めてきた。どうなるのかなあ、と思っていたら、隣のプチ・フリッツが自分の家の機械で乗り入れたかと思うと、またたく間に終えてしまった。隣近所の友情、肩を叩いて笑っているヘルナンとうなずくフリッツから感じるのだった。

夕刻、ぼくの運転でトラクターを車庫へ入れようとしたら、入り口にぶつかり、コンクリートが少し崩れてしまった。そばで見ていたヘルナンが笑っている。バックしてもう一度・・・今度はちゃんと入った。ヘルナンとぼくは顔を見合わせて再び笑った。

6月13日（木）

ヘルナンの家へ着くと、ぼくらは必ず食堂に入りテーブルにすわる。奥さんの入れてくれたコーヒーを飲みながら、きょうの仕事の打ち合わせをするのだ。

仕事に出かけようとする、奥さんが「きょうはホンデュですよ！」と言った。

スイスの代表的な料理なので楽しみだった。

夕方ヘルナンの家に帰ってくると、もう用意が整っていた。

土鍋に溶けたチーズがブクブクとして、それを長いホークの先にパンを刺してからませて食べるのだ。納豆のように糸を引くので、

「テレフリック！（ケーブルカー！）」などと言いながら大笑いしながら食べた。

あと一日で仕事は終わりだ。けれど、今のぼくの心境は一生ここで働いてもいい・・・という気持ちだ。

苦しいことは毎日のようにあった。けれど、ぼくが少年時代にあこがれていた牧場の生活にはなお強く引かれたからだ。言葉の通じない動物や植物を相手に生きて行く人たちの心の中を理解することもできたし、素朴な人たちが大好きになった。

ぼくらは、仕事がとても辛く精神的にも肉体的にも鉛のように疲れきっていても、誰ひとりとしてそれを口に出さなかった。誰かひとりが弱音を吐いていたら、決してきょうまで維持するこ

とはできなかったであろう。最後の10日間の苦しさといったらなかった。しかし、言葉の満足に通じないぼくらを心よく受け入れ、車の保険やタイヤの交換から送別会まで開いてくれた。ぼくらを、まるで自分たちの子供でもあるかのように、あるときはきびしく、またあるときはやさしく包んでくれたヘルナンと奥さん。二人にかえす恩はひとつしかなかった。それは一生懸命に働くことだった。就職のために力になってくれた人たちに、ほんの少しでも迷惑がかかってはいけない。それだけじゃない。人間としての義務でもあった。スイスが大好きなこともあった。

ぼくは、ここで働くほんとうのよろこびをかみしめた。それはお金のためじゃない、働きながら和を大切に、みんなで助け合い楽しく生きていくことだった。ヘルナン一家を囲む人たちから、それを学んだ。

そして、使用人も家族もみんな平等に考え、思い、苦しみもまた楽しみも共にするヘルナンにいくつもの明るい目が見守り注目していることも知った。

ぼくらは、身体の具合がとくに悪いとき以外は、力いっぱい働いた。しかし、ヘルナンやヘルナンを囲む人たちはどう受け取ったのだろうか。

ぼくはこの二ヶ月あまりを振り返ってみた。いいことばかりだった。

どこの家に行ってもまるでお客さんが来たかのように、おいしいたくさん料理で尽くしてくれたのだ。お昼を持ってきてくれるときなどは、ピクニックのようなときだってあった。ぼくらが怠け者であったら、きっととっくの昔に追い出されていたことだろうから。

スイスも日本もそこにはなかった。

あったのは、ただ人間、人間そのものの姿であった。

【働くほんとうの喜びを知る】

この二ヶ月いいことばかりだった。

最初の絵は、チーズフォンデュを食べながら、柔らかくて糸を引くチーズを引っ張りながら「ケーブルカーだ!」と言ってふざける野口さんの挿絵。

2番目の絵は、台車に山と積まれた干し草の挿絵。皆の汗の結晶だ。





【野口久義著『愛する緑の大地』（31）】

5、六月のたより〈5〉

6月14日（金）

干し草作りも全部終わった。納屋に積み上げた干し草の山を仰ぎ、みんなでびっくりするほどだった。

最後の仕事が終わった。通算してみると、日本から持ってきたお金は使わず、働いて得たお金だけで生活し、まだ300フランは残った。もし、働くことができなければ、夏の登山シーズンまで貧しいキャンプ生活をする覚悟をしていたぼくらにしてみれば、とてもうれしいことだった。

いや、それ以上に尊いものを得ることができた。寒さの中で、また暑さの中で、マメとミミズバシの中で泣きながらも、働けるということが、どんなに素晴らしいことかを・・・。

奥さんにはたくさんの洗濯をしてもらった。

また、日本へ帰ったら飲みなさいと言って、上等のワインももらった。

ぼくらは、17日の日にお別れにくることを伝えて帰途についた。

6月15日（土）

南川さんと手島君は、たくさんの荷物をシャモニーまで運んだ。福田君とぼくは山荘の大掃除をやった。

雨が降り注いでいた。

夕方、シャモニーへ行った二人が帰ってくる。

この悪天候はヨーロッパ全域に広がり、20年に一度の悪さだそうである。夏の山登りが心配になってくる。

6月15日（日）

昼すぎ、もう一生のうち二度と来られないかも知れない、この数々の思い出の残る草原を、ギターをかかえて歩いてみた。

あの森も

あの小さな流れも

牛舎も

遠いジュラの山並みも・・・

とっても懐かしい。

ふと立ち止まっては振り返り

花の中にすわっては、うたった。

初夏の風が草原を抜け、白い小さな雲がさすらっていた。

花から花へ、蝶やミツバチがさすらっていた。

仔牛たちはバラのなくなった放牧場で自由に歩み、草をはんでいる。

ああ、なんという静けさなのだろう。

なんというのどかさなのだろう。

夕食は、4人が自慢の腕をふるって最後の晚餐とした。

あしたは、いよいよサレーブを去らねばならない。とても寂しい気がする。

しかし、今のぼくには次の冒険が待っている。その冒険には必ず新しいよろこびが待っているだろう。その冒険に向かって前進しなければならない。でも、よろこびは向こうからはやって来ない。自分の手と足とによって探し求めてゆくのだ。うんと苦しみ、苦しみ抜くのだ。そのうしろには光が、きっと明るい光が待っているだろうから。

アルプスの麓での生活、針峰群、氷河、針葉樹の森、観光客でにぎわう街、ぼくの心はうずいている。

《ひなどりへ》

山荘の壁に猿のこしかけがあった
そのうえに名も知らぬ小鳥の巣があった
かわいた草のやわらかそうなベッドだ
その中で三匹のひなどりが泣いていた
頭と口だけが大きな不格好なひなどりだ
あのひなどりもやがて大きくなるだろう
森や草原を自由に飛び交うだろう
冒険を求めて大空を舞うだろう
ひなどりよ、早く大きくなれ！
そして天地を自由にはばたけ！

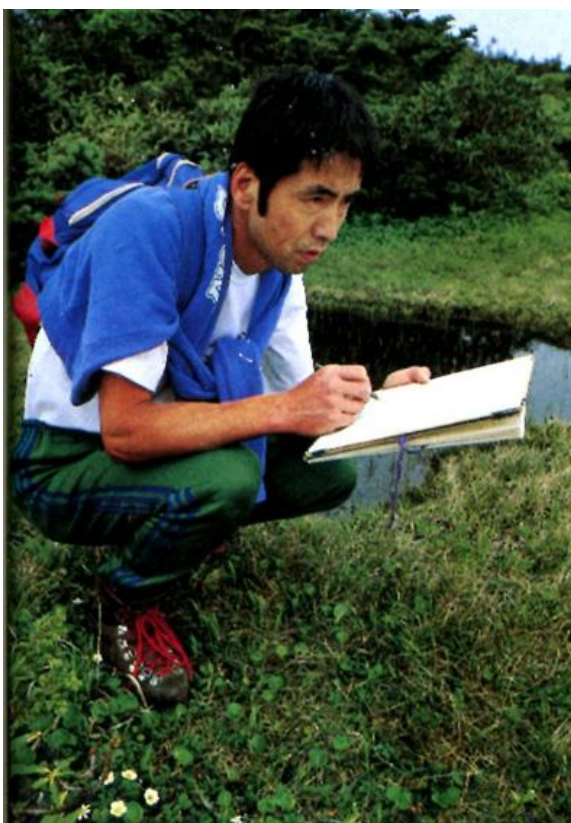
【ひなどり】

最後の仕事を終え、草原を歩く。次の冒険への旅立ち。

最初の写真は、蔵王の山野でスケッチする野口さん。真剣なまなざし。

2番目の絵は、ひなどりの挿絵。

3番目の絵は、山荘西側の森で木の実を食べるリスの挿絵。



山行中もスケッチブックを手離さない



山荘に帰ったぼくらは、今後の日曜日のパーティーのために歌の練習をした。ぼくがギターをあまり弾けないので、レパートリーは少ない。





【野口久義著『愛する緑の大地』（32）】

5、六月のたより〈6〉

6月17日（月）

山荘を離れるとき、やっぱり寂しかった。林に入る前に振り返って眺めた。9月になって日本へ帰るときがきたら、もう一度きてみよう。できたら一晩でいい。山荘で泊まるんだ。朝早く起きて小鳥たちの演奏を聞くんだ。ジュラの夕焼けを見たり、サレーブの星の下でうたったりするんだ。

サレーブよ

山荘よ

またくる日まで

さよなら・・・

ヘルナンやヘルナンを囲む親切な人たちに別れをつげた。一人ひとりの笑顔が離れるのを拒んだ。なんと辛い別れなのだろう。

走って行って牛舎を覗いてみた。

薪割り機械も・・・

ぼくの運転ミスでトラクターをぶつけてコンクリートの欠け落ちた車庫の入口にも・・・

サクランボの木も・・・

さよなら

ジュシイの平和な村

素朴な村人たちよ

午後7時、モンブラン橋のたもとで吉城さんと逢って中華料理店に入った。吉城さんはぼくらのために歓送会を開いてくれたのだった。吉城さんは大きな夢を持っている。夢を持っている人と話をしていると、実に楽しいのだ。

ぼくは、吉城さんからヨーロッパ人と日本人の大きな差を聞いた。それは・・・。

ヨーロッパの人たちは、言葉のわからないぼくらに何度も同じことをいい、辞書を引いてわかるまで説明してくれる。ところが日本人の多くはどうだろう。日本へきた外国人に話もしないし、同じ国民同士でさえなかなか話し合おうとしない。他人のことまで考えている暇がないのか、面倒なのか、いつも自己中心なのである。ぼくはわずか4ヶ月のヨーロッパの生活で、おまけに言葉も満足にできなかったから、いい所が目についていたのかと思っていたが、長く住んでいる吉城さんにそれを言われたのだ。

この人間の差、おおらかに気持ちよく生きているヨーロッパの人たち、それは大陸と島国だけの違いなのだろうか。

だいが夜も更けたころ、二軒目の店を出て吉城さんをメイランまで送っていった。吉城さんを送ってから、近くの公園でごろり横になった。

しのび寄ってくる寒気が酔った身体に身にしみて伝わる。あしたからの冒険を前に、実にいい気分だ。

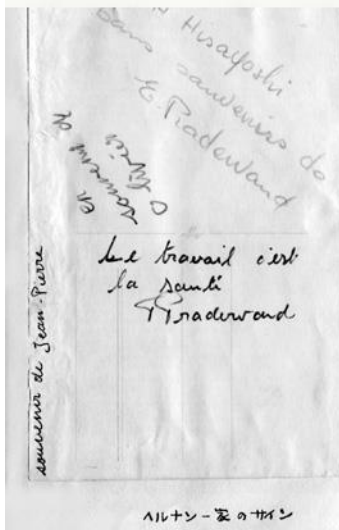
【最終日、ヘルナン一家との別れ】

思い出深いサレーブの牧場とジュシイの村。ジュネーブで吉城さんが開いてくれた歓送会。4人はジュネーブ最後の夜を公園で野宿する。

最初の絵は、公園でテントらしいものを身体にかけて、公園で野宿する4人の挿絵。実にのどかだ。

2番目の写真は、この日ヘルナン家でもらったであろう4人の寄せ書き。ヘルナン・ブラデボンは中央に「仕事に乾杯！」と書き、奥さんのエリザベスは「すてきな思い出 (souvenirs) を」、ジャンピエールとオリビエは二人共「思い出を」と書いているが、12才のオリビエも一生懸命書いているのが好ましい。

3番目の写真は、南蔵王の杉ヶ峰に登る野口さん。後方に刈田岳とエコーライン、ハイライン。手前には前杉ヶ峰。この頃野口さん40才位。若い時からの夢を追い続けている。野口久義著「坊平ペンションだより あるアルピニストのオーナー日記から」(1984)山と溪谷社刊より。





【野口久義著『愛する緑の大地』（33）番外編（アルプスの登攀）】

5月5日・6日に「往年の名クライマー野口久義さんの事」を、2回に分けて投稿した。その次の日から野口さんの手書きの著書『愛する緑の大地』をご本人の了解を得て、活字化するとともに挿絵と写真を添えて、昨日6月7日までに32回にわたって連載してきた。「6、あとがき」があと数ページ残っている。12年後の各人の動向、18年後の野口さんのジュシイ訪問について書かれている。

「6、あとがき」に進む前に、野口さんの6月18日以降のアルプス登山、3月のアルプス登山について、野口さんの著書「坊平ペンションだより」と野口ペンションのホームページなどを参考に、書いてみようと思う。

ブレヴァンから望むとシャモニー針峰群の中央にブレッチェール針峰がそそり立っている。同峰西壁の冬期第2登について、近藤等は書いている。

『夕食をすまして、一同はテラスからシャモニー針峰群を見上げた。空にはアルプスの美しい星がきらめいていた。

シャモニー針峰群の中央にその三角形のどっしりとしたシルエットを見せているブレッチェールの西壁は、わたしには黒い大きな岩塊にしか見えなかったが、5日間の苦闘をすまして、冬期第二登に成功した両君（川崎注：野口久義、南川和勇）の目には、登攀ルートがはっきりと見える、光みなぎる大岩壁として映じたにちがいない。

ガストン・レビュファの言うように

「山は目を開いて見るよりも、まず心の扉を開いて接するべきもの」なのだから』
近藤等著「アルプスの空の下で」（1972）。

野口ペンション、オーナーの日記より転載。

6月18日以降のアルプス登山では、グランドジョラス北壁やモンブランに登っているが、これらについては詳しく書かれているものが僕の手元にはない。

マッターホルン北壁については、田部井政伸、吉村弘治、須田義信との4人パーティーで登ったが、夏の嵐で壁の中3回のビバーク、4晩目をソルベイ避難小屋で過ごし、そこで野口さん、田部井さんは足が青白く凍りついてしまっているのに気づく。下山の時、特別に無料で動かしてくれたケーブルカー、山麓駅から街までの馬車の用意。

『・・・スイスの人たちにもう感謝の気持ちでいっぱいだった。「観光の国だから、というより人間として当然のことをやっているのよ!」と入院先の看護婦さんから聞いたとき、ぼくは深く考えさせられた。・・・ぼくたちが泊まっていたホテル・バーンホフのパウラ・ビナーさんが見舞いに来てくれた。「二日目に天気が崩れたのに、なぜ降りなかった?」といいながら、ぼくたちの厚く巻かれた包帯に目をやるビナーさんの目には涙が光っていた。

・・・（中略）・・・雄々しくそびえるマッターホルン。その北壁で、ぼくはかつてない厳しさを味わった。しかし、それにもまして心にしみたのは、国境を越えた人と人との結びつき、友情だった。

ベッドに横たわっていると、いくつもの思いがよみがえり、胸が熱くなってくるのだった。』野口久義著「坊平ペンションだより」（1984）山と溪谷社刊より。

最初の写真は、ブレッチエール西壁ジョー・ブラウンルートを近藤等撮影の写真に記入したもの。野口さんが作成し「岩と雪」誌に発表された1968年のルート図（トポ）を参考にして川崎作成。壁の中で4回ビバークしている（赤丸）。

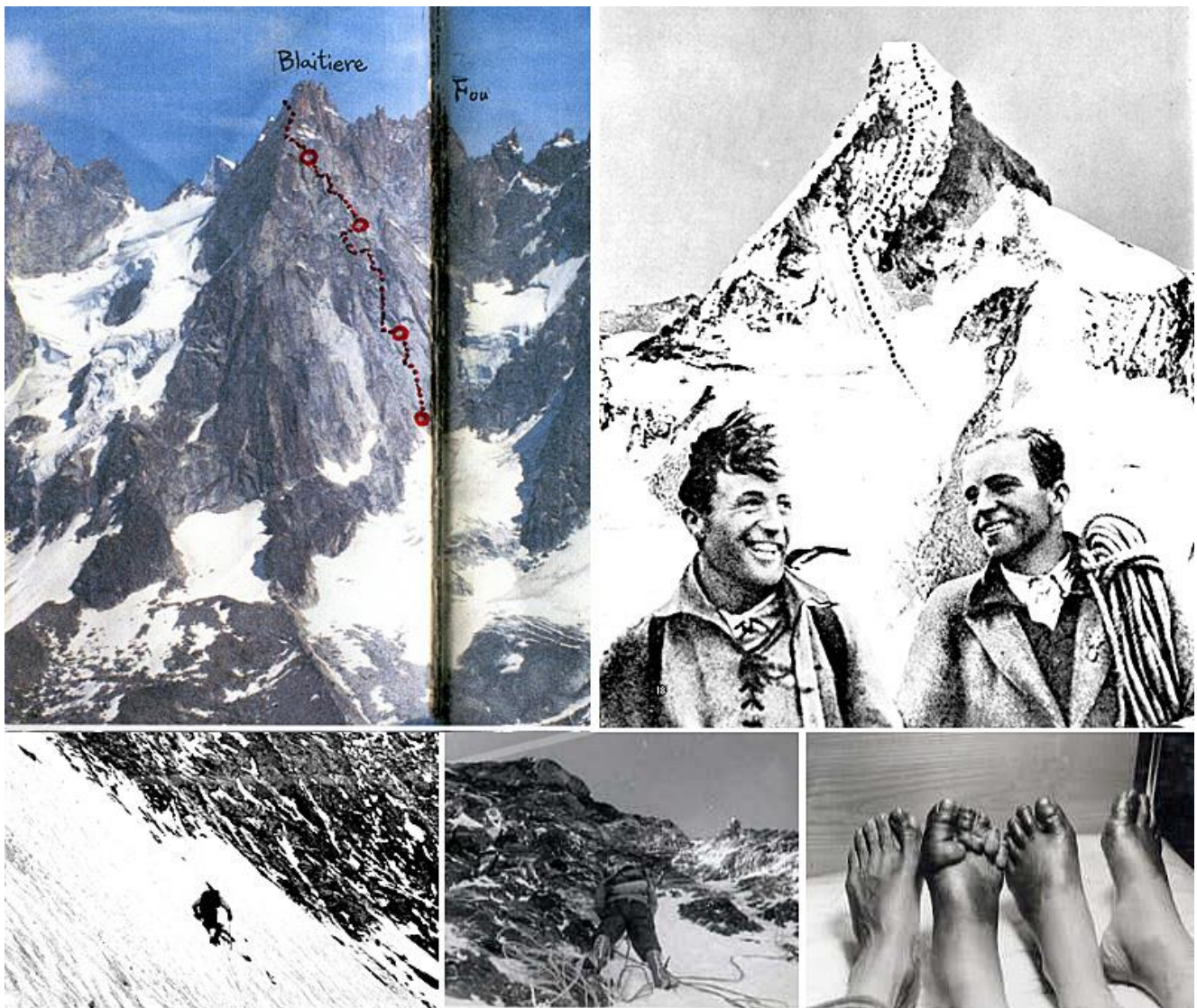
因みに、西壁は最後の所で北西稜に合流するが、この北西稜は1972年9月に加藤保男、鈴木勝、中野融によって1ビバークで完登された。高度差800m、V上、素晴らしい日本ルート（Voie Japonese）として公認された。と近藤等さんは書いている。近藤等著「わが回想のアルプス」（2010）東京新聞刊より。

2番目の写真は、マッターホルン北壁シュミットルート（上）と同ルート初登攀者のシュミット兄弟。フランツとトニー（下）。ガストン・レビュファ著、近藤等訳「マッターホルン 理想の山」（1972）あかね書房刊より。

3番目の写真は、北壁の氷斜面上部とこれに続く岩場。急峻な氷と更に傾斜を増す岩場の写真。ガストン・レビュファ撮影。ガストン・レビュファ著、近藤等訳「マッターホルン 理想の山」（1972）あかね書房刊より。

4番目の写真は、野口さんの写真記録から北壁上部（山頂まであと40mの所）。野口ペンションのホームページ、オーナーの日記より。

5番目の写真は、入院中の野口さんと田部井さんの凍傷でおかされた足。野口ペンションのホームページ、オーナーの日記より。





6【野口久義著『愛する緑の大地』（34）番外編その2（瑞牆山の開拓に貢献）】

番外編その1では、野口さんのヨーロッパ・アルプスでの活動について述べた。

その2では、帰国後の国内での登攀活動について少し書いてみようと思う。

瑞牆山は小川山と並んで今や日本の一大クライミングエリアとなった。志のあるクライマーの中にはこれらの岩壁に日常的に登るために、山梨県北杜市などに移住する人も多いと聞く。

野口さんが、黎明期の瑞牆山の「大ヤスリ岩」に登ったのは、1972年4月。初登者と北稜山岳会の仲間3人、計5名で登ったという。第2登か。

「岩と雪89号」（1982）山と溪谷社刊に10ページにわたって大内尚樹さんが「HARD ROCK 奥秩父（1）瑞牆山」を書いている。その中の記載、

『北稜山岳会には、初登者が記録を公表しなかった大ヤスリ岩の登攀写真と報告を「山と溪谷」に発表した野口久義がおり、彼は一ノ倉沢コップ上岩壁右岩壁左カンテや剣尾根ドーム北壁北稜山岳会ルートの初登者であり、1968年にはシャモニ針峰群のプレティエール西壁冬期第二登など、欧州アルプス登攀時代の一翼を担ったこともある。そうした人が、小さな岩塔をそれなりの面白さがあるものとして紹介したことは、その後の瑞牆山の岩場開拓に影響を与えている。』

因みに、野口久義さんはこの年佳子さんと結婚。大ヤスリ岩に登った次の月の5月ハネムーンで利尻山東稜を二人で登っている。なんと、利尻には大ヤスリ岩の初登攀者もハネムーンで来ていたそうだ。

野口さんの心は、卒業論文のため1975年に4ヶ月利尻島に住んでいた僕には良くわかる。野口さんは奥さんに、日本では最もシャモニ針峰群に近い景観を持つ積雪期利尻岳南稜のローソク岩、大槍などを見せたかったのだ。

最初の写真は、大ヤスリ岩の山頂部。登攀を終え、懸垂下降しようとしたクライマー。

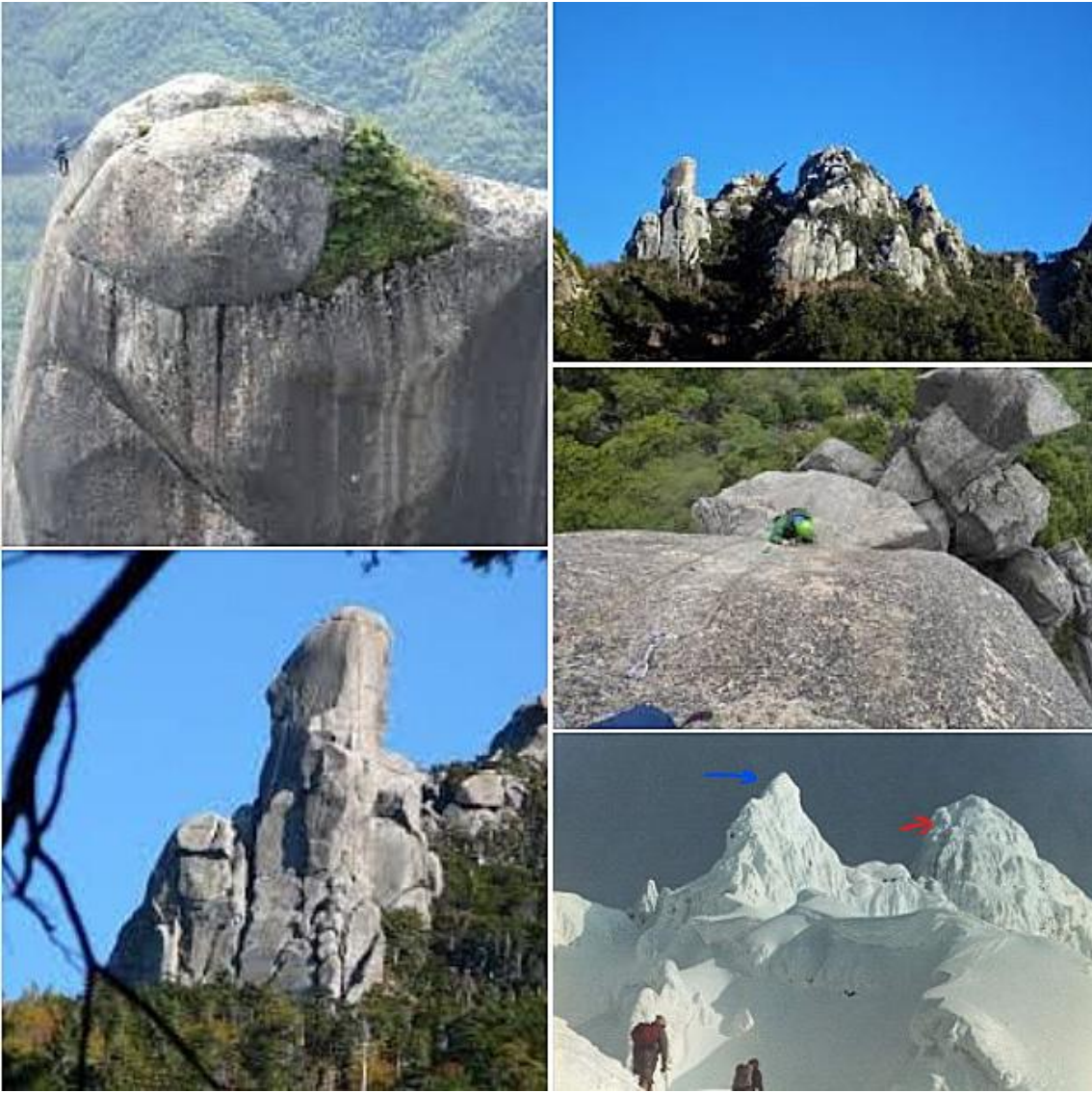
インターネット映像。

2番目の写真は、大ヤスリ岩中景。この写真、確かに灌木も少なくすっきりした岩塔だ。インターネット映像。

3番目の写真は、大ヤスリ岩（左）と瑞牆山（右）。インターネット映像。

4番目の写真は、頂上からフォローするクライマーの映像。下の森林が素敵だ。インターネット映像。

5番目の写真は、利尻岳南稜の登攀写真。赤矢印が南稜バットレス。青矢印が大槍。インターネット映像。



オーナー若き日の足跡 No.37 川崎泰照さんの face book より

【野口久義著『愛する緑の大地』（35）最終回】

6、おわりに

楽しかったサレーブでの生活。もう 12 年も前のことになった。あの頃の人たちもずいぶんと変わった。福田君も南川さんも日本に住んでいるが、手島君はずっとヨーロッパに住みついてしまい、今はフランス女性と結婚してジュネーブに住み、ローヌ時計店に勤めている。

ローヌ時計店に勤めていた山川さんは、自分の夢を実現し、ジュネーブに日本料理店を開いた。残念なことに、お母さんは 5 年ほど前に亡くなられた。

日本には住みたくないと言っていた吉城さんは、今茨城の住民となり冬になるとここにスキーをしにやってくる。

共同通信社の下田さんは、だいぶ前に日本へ帰られ、現在は東京に住んでいる。

夏にグリンデルワルトで友だちになったフランシーヌとロビーは、この下田さんの家の近くで、日本へ帰るときに、この二人に会った。昨年（昭和54年）は冬にロビーが友人と、秋にはロビーの家族が日本でのバカンス中4日間ここで滞在していった。

行ってみたい。サレーブへ。どんな風になら変わっているだろうか。ヘルナンズの家族はどうしているだろう。10才だったオリビエも、もう22才だ。5才だったアニクは17才だ。それだけ、ぼくも年をとったんだ。行ってみたい。

ぼくの心のふるさと。

サレーブ！！

《おわりの後の始まり》

楽しかったサレーブでの日々……。サレーブの放牧場とジュシイの平和な田園の風景は、深く心の奥底にしみこんでいる。いつの日か行ってみたい。再びあの地に立ってみたい……。と思っていた。

ところが、18年後の1985年7月、その夢がかなった。みんな年はとったけれど、あの風景も人の心も変わっていなかった。牧場主のヘルナンズ一家は心よく迎えてくれた。食事を共にしながら、18年前を思い出して語り合い、現在の生活を話し合いながら、そこにはいつも笑顔がとだえなかった。

サクランボがたわわに実っていた。

小麦畑は黄金色に変わり始めていた。

トラクターで走った日があつかしい。

たった3ヶ月しかいなかった土地が、まるで自分が生まれ育ったように感じられるのは、なぜなのだろう。

この旅は、グリンデルワルト、ツェルマット、シャモニと山の街から山々を眺める旅だった。もちろん、天気もよく山々もやさしくほほえんでくれた。

けれども、こうしてジュシイの平和な村でヘルナンズ一家と笑いながら、語り合いながら過ごしたわずか2時間は、一番心に残るものだった。

旅に出て、こうして心に深く残る思い出を作り出してくれるのは、その自然と人なのだ。

ここ坊平のこのペンションもそうでありたい。

旅人たちのやすらぎの地として……。

1985. 8. 7

《山川さんからのお祝いハガキ》

旧住所に出した、お年賀状。今頃になって戻ってきました。

ペンション開業、二重におめでとうございます。

山と料理と、好きな道での暮らし、羨ましいです。

母が居れば喜びでしょうに。一度訪ねてみたいもの　ボンチャンス

2月22日（1977年）

野口君

山川正子

このハガキは、「日本料理 寿府 山かわ」作成の絵ハガキらしい。表側の写真は何だろうと思ってしまう。

////////////////////////////////////

愛する緑の大地

令和3年6月12日

著者 野口久義

発行者 野口久義

発行社 風見鶏出版

〒999-3113 山形県上山市坊平高原

電話 0236-79-2773

////////////////////////////////////

最初の写真は、第6章の中扉挿絵。再び思い出深いサレーブの4人で住んだ山荘。

2番目の写真は、1986年に野口さんがジュシイを2時間訪れた時のヘルナン一家との集合写真。モノクロがカラーに変わっている！

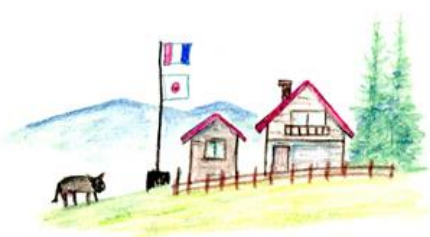
3番目の写真は、野口さんの唯一の著書「坊平ペンション あるアルピニストのオーナー日記から」（1984）山と溪谷社刊 の裏表紙と表紙右半分。表紙には最も愛する家族、裏表紙には2番目に大事な「愛する緑の大地」。

4番目の写真は、茨城に住む吉城肇さんが野口ペンションに連れてきた物理学者。高エネルギー研究所に研修に来ている若手研究者。娘二人と来ていた、アラン・ド・レスケン子爵、爵位を持っているが、日本と違ってとても気さくな人だったそうだ。

困みに、吉城さんはヨーロッパ滞在中、マッターホルンツムット稜（北壁の右側の稜線）を高田光政さんと登っている。

5番目の写真は、山川さんが、野口ペンション開業後1977年に送ったハガキ。達筆で読み取りづらいので、本文に活字化した。

6. おわりに



161



259 V 冬のたより



ベルサイユのアラン・ド・レスケンさんの家族と共に。



左より、息子のミカドセル、ヘレン、奥のエリザベス、木村。 85.7.12

RESTAURANT JAPONAIS
YAMAKAWA
run Henri Barnavelot 3
1207 Geneve
☎ 022 36.89.23 - 36.47.11

野口石
ポンテニス
ジュリ

Reproduction interdite

SALON DE L'AUTOMOBILE GENEVE
27 MARS 1977

PAR AVION LUFTPOST VIA AEREA

MR. H. NOGUCHI
999-31 JAPAN
山形県上山市 新野
坊平高原
野口ペンション
野口久義様

日本料理 野口石 宛
心よりお待ちしております

山と料理と好む道、の茶と
黄い草、母が居れば喜ぶ
しよん、一歩おぬみれば
ジュリ、ジュリ

100

【川崎による、あとがき】

今日で5月8日から毎日連載してきた『愛する緑の大地』は終わりです。連載をこころよく承諾して頂いた野口久義さん、そしてサポートしてくれた佳子さんに感謝です。

毎日、あるいは飛び飛びに読んでくれた読者の方々にも感謝です。

野口さんの唯一の著書「坊平ペンション あるアルピニストのオーナー日記から」にもこの牧場生活が書かれていますが、わずか3ページです。この3ヶ月の事柄を163ページにわたって手書きで書き連ねた本『愛する緑の大地』、出版の日の目を見なかった本が可哀そうでなりません。しかも、出版された本「坊平ペンション あるアルピニストのオーナー日記から」に比べると、朴訥な表現ながらもより生々しく感動的な本だと思います。

僕は、これまでクルト・ディームベルガー、ジュリー・テュリスの著書（8,000m 峰登攀記）を翻訳してきて、希望者に無償でそのシリーズを製本したものをお送りしております。

今回も『愛する緑の大地』を製本したものを、無償で希望される方々にお送りしようと思います。製本したものを手に入りたい方はご連絡下さい。送り先の住所をメッセージで教えてください。

野口さんの二つ目の著書が、もっと多くの方々の目にふれますよう、願っております。



最後までお読みいただきありがとうございました。
野口ペンションの本棚でひっそりと余生を全うするはずだった日記
に、もう一度読んでいただく機会を与えてくださった川崎さんに感
謝致します。
ありがとうございました。

2021年6月 野口久義

